

## 第6回人文学・社会科学特別委員会における主な意見

### 【人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト】

- このプロジェクトの課題は、多様な研究者やステークホルダーをいかに集めるかということ。また、このプロジェクトは、人文学・社会科学の根源的な問いに立ち戻って取り組むというものであり、この仔細を、参加する研究者の方々に、どのように周知し、理解してもらうかということ。
- ワークショップの感想として、参加者から、普段出会わないような研究者と意見交換する、いい刺激になった、新しい気づきにつながる意見交換ができたなど、ポジティブな意見を複数いただいた。一方で、ワークショップの趣旨が分かりにくかった、目的がよく分からなかったなど、今後改善すべき点も幾つか出てきた。全体を通じて、このプロジェクトが目指す、自由で広い場づくりと、求められるアウトプットの一つである、直近のチームづくりを高次元でバランスさせるには、まだまだ課題があると感じている。
- このプロジェクトについて、どこにゴールを持っていくのか、どういう観点から評価するのかというのが大きな課題。具体的な成果としては、「プロジェクトとしてチームを作る」ということを挙げざるを得ないが、あまりそこに焦点を置くと、肝腎の共創の場という要素が失われてくるということになる点が難しい。
- 全てのグループが、チーム構成や共創等、どちらも満たすようなバランスがいいものをするというよりは、思い切ってメリハリをつけたほうがいいのではないか。
- このプロジェクトに参加しようという研究者のモチベーションやメリットが重要。分野を越えたチームを作って研究をしたい人をどうやって育てていくかということが、前提条件として重要。
- ジェンダー比をバランスよくするとともに、女性研究者がワークショップやシンポジウムなどにおいて中核的な役割を担えるようにすると思う。
- 通常のワークショップでは、セッション時間以外の時間帯で色々と交流することが、その後の人間関係構築に当たって重要となるが、オンラインの場合、そのような場が作りにくくなっている。このプロジェクトにおいても、これらを克服する工夫を考え続けることが必要。

○3年間という短いプロジェクトであるが、着地点を含めて、中長期的な見通しをもって進めることが重要。また、その際には発信も非常に重要。

### 【人文学・社会科学データインフラストラクチャー構築推進事業】

○デジタルデータを扱うインフラストラクチャーは、情報技術の変化や革新に常に対応する必要があるため、放っておくと急速に陳腐化する。このため、定期的な更新が不可欠。具体的には、ソフトウェアの更新やセキュリティ対策、国際標準の変更に伴う統制語彙の改定、環境変化に合わせたデータ共有の手引きの改訂など。

○長期的には、現在の5つの拠点機関以外にも参加できる機関数を増やして、より多く、かつ、多様なデータの保存・共有・利活用を促すことが望ましい。

○日本には、海外のデータアーカイブやリポジトリで働いているような、データの保存・共有・利活用に特化した専門家がない。デジタルの研究資源をいかに保存・共有・利活用するかという観点からの専門家の育成及びその専門家を支える組織基盤の形成が重要。

○データアーカイブ、データリポジトリの意義を5点述べる。

1点目は、データの散逸を防止し、長期保存できる。2点目は、データが見つけやすく、アクセスしやすく、相互運用しやすく、かつ再利用しやすくなるという点。3点目は、分析の再現性の担保。4点目は、新たな視覚からの再分析が可能となる。5点目は、予算が乏しい若手研究者の研究や、学部生対象の授業でも、本格的なデータ分析を行うことができる。

○データアーカイブは、これからのオープンサイエンス、データ駆動型科学を支える重要な存在。データインフラストラクチャー構築推進事業は、技術者の雇用やシステム開発への投資など、アーカイブの屋台骨を支えてくれる貴重かつ希少な財源と認識。今後の課題は、データ公開・共有を、このような財源を基に更に増加して、データ利活用の環境の向上などに努めること。

○日本には特に研究で使える政府統計を含むアグリゲートデータが脆弱なため、海外における日本研究が非常に衰退している。海外でPh.D.を取得する場合、基本的にデータが無い国を研究対象として扱うことはない。韓国や中国では政府機関がほとんどのデータを公開し、比較的低額で販売している。日本のアグリゲートデータは、省庁によってユニットが違ったり基準が異なるなど、非常に複雑で、しかも高額である。このままでは日本研究がどんどん海外で捨てられていくことが懸念され、例えば調査データに関しての調査票の英訳化をはじめ、まだまだやらなければならないことが多いという気がする。

- このプロジェクトで支援している5つの拠点機関のデータ以外にも、国内の様々な大学等が重要なデータを所有しているので、それらのデータを、今後どのようにこのカタログに取り入れていくのか、資金的な援助も含めて検討することが必要。
- このようなプロジェクトを継続していくためには、データの共有・利活用に関する専門的な人材、特に、単にデータの専門家というだけではなく、データの知識と人文や社会科学のドメイン知識を有する人材を育成確保していくことが必要。また、そのような専門人材のキャリアパスの確立が望まれる。
- コンテンツとともにコンテキスト（文脈情報）が非常に重要であり、そこに人文学者、社会学者、情報学者とのコラボレーションが明確に見えてくるが、それらの情報の出し方を今後検討することが必要。
- このプロジェクトで扱っているデータは網羅的ではないので、メタデータのメタデータといったものも必要となるのではないか。また、メタデータの取扱いについて、情報学・情報工学分野との交流や共同研究を継続して実施することが必要。